



ここにこんな人が

海外出張

利根地下技術(株) 社長
岩盤削孔技術協会 副会長

奈良 清美

今回は奈良副会長の“海外出張体験談”をお送りします。



奈良 清美(なら きよみ)

昭和13年9月30日北海道生まれ。昭和32年(株)利根(旧利根ボーリング)に入社。昭和63年利根地下技術(株)に転籍。平成12年4月代表取締役社長に就任。

昭和32年、卒業と同時に(株)利根(旧利根ボーリング)に入社、工事部に配属された。次に技術開発部に配属され、同社製品の納入指導のため海外を専門に担当したが、ここでは韓国・台湾・中国・インド・英国・ザンビヤ・南アフリカ・ソ連・ベトナム・インドネシア・ペルー等に出張した際、出張にまつわる思い出を2~3紹介してみたい。

■ソ連出張(昭和57年1月)

ソ連は、第二シベリア鉄道の建設工事のためバイカル湖の北、200kmの山奥に出張した。ちょうど厳寒の時期にあたる12~1月であり、普段は零下30~40℃、まれに零下50℃というときもあった。寒冷地の出張ははじめての経験のため、どのような防寒対策をすればよいかかわからず、南極探検隊の事務所を訪問し、アドバイスを受け装備一式を購入した。これらの防寒具を着用してみると、ちょうどペンギンが歩いているようで異様な感じであり、特に、色が目立つように黄色や赤などの原色を使っているため、2~3人が揃って歩いていると注目の的であった。

しかし、これら南極用の装備はせいぜい零下20~30℃程度が対象であり、シベリアでは通用せず、帽子や靴は現地で貸してくれたものを着用した。

なお、外気は寒いが宿舎は暖かく肌着1枚で過ごせ、そのうえ通勤は木製のトンネル内を歩くので、外気に長い時間接することは避けることができた。

シベリアの寒さがどのくらいかを知ってもらうために、具体的な例を2~3紹介する。

- ①息を強く吹くと4~5m先まで白い線となってながれる。
- ②機械類に素手で触ると手の皮が剥げてしまう。
- ③小便等がすぐにツララ状態になることはなかったが、顔面は痛い。

食事は外国人とのことでぜいたくであった。黒パンが主食でキャビア、ウォッカは飲み放題であったが、私は酒も飲めないし、キャビアより日本のイクラのほうがおいしく感じたため、あまり感激はなかった。

現地の労働者とはコミュニケーションをとるべく、宿舎に遊びに来るよう招待したが、監視人が宿舎に入れさせず、外人との接触を断っていた。また、夜通し美人が監視しており、共産圏にきている実感を肌で感じるとともに、当時の労働者は罪人が多く、刺青を全身にしている者や、2mもある大男が相手であり、その怪力には驚かされた。

給料は厳寒とトンネル内作業という悪環境下のため、通常の2倍が支給された。また、ここではフィンランド式のサウナを体験したが、木の葉で体を軽くたたくのが特徴であった。

■韓国出張(昭和39年12月)

韓国にはたびたび出張したが、最初が一番印象深かった。昭和30年代後半、韓国は例年の干ばつに見舞われ、深刻な灌漑用水不足に悩まされていた。そのため、井戸の調査を依頼され、急遽、昭和39年12月に現地に渡り、現地技術者に作井を指導したが、掘削の基本である泥水(粘土)の効用から指導しなければならなかった。

当時の韓国は貧しく、藁ぶきの家が多く、現在のようなカラフルな屋根やビルも少なかった。飛行場からソウル市内までの間で思わず涙が出そうになった記憶がある。まだ朝鮮戦争の余韻が残り、夜間は外出禁止令が出され、週に何回かは空襲訓練を行っており、途中で車を降ろされビルの地下に避難したことも何度か経験した。ご飯は白米が食べられず、穀物が30%くらい必ず入っていたことが一番記憶に残っており、当然、寿司屋に行っても同様であった。

当時の大統領はパク氏であったため、彼の生まれ故郷である大邱の田舎まで調査に行ったが、田舎町の居酒屋に行った折、まだ日本語が禁止であったにもかかわらず日本の歌を聴かせてくれたのには驚いた。なお、貧しさのあまり盗難が多く、現場には夜通し留守番がつき、現場機材の管理を行った。また、スリが多く、われわれの仲間も見事財布をすられたので、どのくらい技術があるかを試すため、ズボンのうしろに小銭を入れバスに乗ったが、本人が気をつけていたにもかかわらず、見事に抜き取られてしまった。聞くとところによると、吊り輪に手をかけているだけでカフボタンがとられたという、驚くべき技術であり脱帽した。

■インド経由北イエメン出張(昭和56年6月)

インドでの仕事は、日本語の通訳がついてくれたので問題はなかったが、インドからエジプト経由で北イエメンに行く際、英語の通訳をつけてくれたが、私は英語が苦手なチンプンカンブンであり、結局途中から一人旅となった。そのため、飛行場で悪戦苦闘し、何とかイエメン行きの飛行機に乗ることができたが、飛行機がボンコツで窓は壊れて外気が入るし、乗客と荷物が一緒であったり、着陸するまで不安は消えなかった。しかし、窓から見るイエメンの段々畑の美しさは強烈な印象であった。

イエメンでは直接目的地に着くと思っていたが、途中で1カ所寄り道をした。私は何の疑いもなく降りてしまったが、どうも様子がおかしいので確かめたところ、タイズというローカルの空港であった。もしそのときに気がついていなかったら、